



アジアにおける IT 事情 (ASEAN 諸国の状況・2)

前(財)国際情報化協力センターシンガポール事務所長
占部 浩一郎

urabe.singapore@yahoo.co.jp

●
前回シンガポールを中心として ASEAN の IT 状況を述べたが、今回はその他の ASEAN 諸国の IT の状況を説明したい。

■ ASEAN

ASEAN (東南アジア諸国連合) は、1967 年にインドネシア、シンガポール、タイ、フィリピン、マレーシアの 5 カ国で設立された。その目的は、泥沼化するベトナム戦争を背景に、地域の共産化を防ぎつつ地域の安定性、独自性を確保しようとするもので、政治的な意味合いが強い機構であった。その後、東西冷戦の終結等を経て経済問題が大きなテーマとなる中、社会主義国であるベトナムも加入するなど、東南アジア地域における地域協力、経済協力の中心的枠組みとなった。現在の加盟国は、上記の原加盟 5 カ国にブルネイ、ベトナム、ミャンマー、ラオス、カンボジアを加え 10 カ国になっている。IT 関係では ASEAN 首脳会議の他、通信大臣会合、経済大臣会合なども行われており、それぞれに、日本、中国、韓国等の北東アジア各国も参加する枠組み(+1, +3 などと呼ばれる)も存在し、加盟国内のみならず、周辺諸国との対話の組織となっている。

このように、ASEAN としての活動は活発であるものの、EU などと異なり各国の経済状況の格差は著しい。経済発展が最も進んでいるのがシンガポールであり、これにブルネイが続く。経済指標上はこの二カ国が「先進国」である。これに「発展途上」であるマレーシア、インドネシア、タイ、フィリピンが続いている。カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムはその英語名の頭文字をとって、CLMV 諸国と言われ、経済発展の後発地域である。なお、ブルネイは人口が 40 万人に満たず、その収入のほとんどを石油、天然ガスに頼り、この所得の多くを国王が支配していることから、市場規模は極めて小さい。

■ IT の状況

IT の動向もこのような経済規模にほぼ連動している。ASEAN 各国の IT 化の比較を 2001 年に ASEAN 事務局と IBM Global Service 社が共同で行っている。これによれば、シンガポールが第 1 位 (Extending)、第 2 位がマレーシア (Embedding)、第 3 位グループがタイ、フィリピン、ブルネイ、インドネシア (Evolving)、第 4 位グループが CLMV (Emerging) となっている。

この第 4 位グループのうち、ベトナムは完全に一歩抜け出している。これは IT のみならず、経済全般に言えることで、インフラの不足という問題を抱えるものの、8 千万人という人口、勤勉な国民性、安価な労働力を背景に、日本などからの投資を呼び込んでいる。ちなみに国際電気通信連合 (ITU) の World Telecommunication Indicators 2004 によれば、2002 年のインターネット普及率 (推計値) は、シンガポール 50.4%、マレーシア 32.0%、タイ 7.8%、フィリピン 4.4%、インドネシア 2.1%、ベトナム 1.8%、ラオス 0.3%、カンボジア 0.2%、ミャンマー 0.1% の順になっている。

IT の発展段階を理解するのに注意を要するのは、このような調査や統計データに現れてこない部分である。IT は軽工業から重工業というような発展のステップを超越した発展が可能である。ASEAN の第 3 グループの途上国といえども多数の超高速サーバーを駆使して 3 次元グラフィックスの作成などを行っている。

■ 各国の話題

各国の状況について説明をしたいのだが誌面も限られていることから、ちょっとした小話でその代わりにしたい。



マレーシアのライバル意識

マレーシアの IT 政策は、MSC (マルチメディアスーパーコリドー) である。首都クアラルンプールと新国際空港間に広がる 15 km × 50 km の広大な地域を開発し IT 産業の一大産業拠点に育て上げようという計画である。当初は企業進出が進んでいなかったが、隣国シンガポールよりも低コストに押さえられることなどを背景に、欧米企業が開発センターを設立するなどの動きが始まっている。シンガポールの総面積が 700 km²弱。

MSC の面積はこれを超える 750 km². その面積に込められたマハティール前首相の思いが、徐々に実現に向かっている。



タイの周辺国政策

ASEAN 各国の GDP は、シンガポールが最大であるが、第 2 位グループの中でインドネシア、タイがほぼ拮抗している。政治的、経済的安定性や ASEAN における自動車産業の一大生産拠点となったことなどを考えると、タイが第 2 位としての座を確実にする可能性が高い。インドシナ半島の中で唯一独立を保ってきたという歴史的背景や近年の経済発展を背景に、周辺諸国に対する影響力を強化し、インドシナ半島、さらには東南アジア諸国の中心としての地位を目指している。実際隣国ラオスやカンボジアではタイパーツでの買い物が可能である。本年 2 月に (財) 国際情報化協力センターはタイ国立電子コンピュータ技術センター (NECTEC) と共催して CLMV の研修生を対象にオープンソースソフトウェア研修を実施したが、こうした活動や、IT を活用したメコン開発への支援等が、日本とタイとの IT 分野での戦略的協力プログラムとなるだろう。分野としては、自然言語処理とコンテンツ系が期待される。独自の成熟した文化、文字を持ち、人口も 6 千万人以上いることから、タイ独自のシステムが開発されていく環境にある。



米国指向のフィリピン

フィリピン経済の特徴は、出稼ぎにある。これは、さまざまな職業に及んでおり、工事労働者、メイド、エンターテインメント、最近では看護師の出稼ぎなどがある。日本との経済連携交渉でも主要な交渉事項となっている。フィリピンの GDP と GNP は大きく乖離している。これはまさに海外への出稼ぎ者がフィリピンへ相当な額の送金をしていることに他ならない。当局が補足していない送金も膨大な量になると思われる。フィリピンの基幹産業は人材輸出と言われている。フィリピン人が海外で働くことができる理由の一つに英語力がある。アジアでは英語が使える国も多い。シンガポールでは共通語として使われ、またインドも「英語力を生かしたソフトウェア開発」などとも言われる。しかしながら、シンガポールやインドの英語は訛りが強い。一方、フィリピンの英語はもっとも訛りが少なく、オフショアのコールセンターなど、その英語力を生かした産業が特徴になっている。

こうしたことを背景に、特に IT 産業は米国指向となっており、多くの IT 人材が米国での成功を夢見ている。



ベトナムの日本語熱

最近日本の IT 産業は、ベトナムに注目している。低賃金であった ASEAN 諸国や中国の賃金水準が上昇しており、労働集約型の産業の立地を再構築する動きがある。巨大マーケットである中国の他に、もうひとつの生産拠点を設けることになるのだが、タイ、マレーシアといった国に加えベトナムという

選択肢がでてきた。ハノイの国際空港のそばに住友商事が開発した工業団地があるが、ここには、キャノン、松下、デンソーなどが進出しており、現在 2 期目の開発が行われている。デンソーには、日本語のできるエンジニアがいて、自動車部品の開発を日本との共同作業で行っている。また、ベトナム最大のソフトウェア会社である FPT には日本語ソフト開発部隊がいて、日本の IT 産業向け開発を担当している。日本語のできるソフトウェアエンジニアというと、中国大連のソフトウェア産業が有名であるが、ベトナムでも「日本語のできるエンジニア」というビジネスモデルが戦略の 1 つとなっている。



ミャンマーの事情

旅行者、特にバックパッカーが愛用するインターネットカフェはアジア・ASEAN 各国に広がっている。値段は国によりまちまちだが、1 時間でせいぜい 100 ～ 200 円程度である。1 日 1 ドルの生活をしている国民にとっては大変高価なもので、特に観光地などでは外国人の利用がほとんどだ。ラオスのルアンンプラバンは、町全体が世界遺産に登録されており、日本人の観光客も多い。ここで日本語環境の PC を見つけ、驚いた。他方、ミャンマーはインターネットカフェがほとんどない。これは技術の問題と言うより、政治の問題である。ミャンマーは軍事政権と民主化運動という国内の政治問題を抱えており、情報が自由に行き来するインターネットに対する規制が極めて強い。国内で初めてインターネットカフェが実現したのは、2003 年のことである。最近になって、こうした規制が緩和されてきており、おもしろいことに静岡の IT 企業がミャンマーの観光地バガンでプロバイダ事業を計画している。ミャンマーは英国領であったことから、比較的英語力が高い。これを生かした IT 産業への期待も高く、多数の学生がコンピュータ学校でソフトウェア技術を習得している。政治の問題が解決して、IT の飛躍を遂げてくれればと期待している。



カンボジア

3 年半にわたり、ASEAN 各国の IT 動向を調査してきたが、記憶に残る話の一つに、カンボジアで見たパソコンがある。カンボジアの商務省を訪問したとき、「これは、1989 年からのパリの和平プロセスにおいて、文書を起草するために私が利用したパソコンである。」として、大臣自らが東芝のラップトップを見せてくれた。パリ協定は 1991 年に結ばれ、カンボジアの平和的再建が始まるのだが、その中で日本製 PC が使われていたのである。この事実と、彼がその PC を大切に保管していたことに感銘を受けた。カンボジアは、ASEAN に 1999 年に加盟した。もともとラオス、ミャンマーとともに加盟の予定であったのが、国内で武力衝突が起こり延期されたのである。情報の流通は、結果として世界の平和、発展に役立つ。カンボジアやラオスの「インターネット普及率」が高くなると、ASEAN はまさに発展段階に入る。

(平成 16 年 8 月 31 日受付)